



いつか



ヤチ

黒いバイクがいま出雲をでる。

灰色の不吉な雲がこの国を覆っている、空を侵食し続ける灰色の雲。

東へ進路を向け不吉な大気を切り裂くように黒いバイクは駆け抜けていく。

携帯が鳴る、メールだ。「タケ！マック！すぐ！」簡潔な彼女の指令が届いている。  
立ち上がりメットを掴み部屋を出る。  
階段を降り、玄関へ、扉を開き、「アンタマが呼んでるから行ってくる！」  
ぼくはそれだけ叫んで、ガレージへ。

キーを差込みロックを解除してサイドを蹴り上げ表へ押し出す。  
シートにまたぎ、キー差込みラインを繋ぐ、キックのステップを右足で回転させ蹴りこむ。  
十分整備されたYAMAHAは躊躇することなく吼える。  
学校の近くにあるハンバーガーショップへ向けてバイクを走らせる。

「タケ！タケ！遅いよ！、でも来たから許す！」  
店に入ると同時に彼女の元気な声がぼくに浴びせられる、声の主が陣取るテーブルへ歩き、  
彼女の正面に座る。

「アンタマ今度はなにかな？」  
「用事がないと呼んじゃだめか？タケ！」  
安納珠代、ぼくを含め、まわりの友人は彼女をアンタマと呼んでいる。  
ぼくをタケと呼び捨てるのは彼女だけだが。  
「別にいいけど」  
「じゃあだまって聞け！タケ！重大発表があるのだ！」  
「重大発表かぁ、ピクルスがひとつ多く入ってたとか？それに」  
テーブルのかじられたハンバーガーに視線をやりながらぼくが言う。

「タケ！君はいつも志が低いのおー！彼女として、時々なさけなくなるよ、とほほほ」  
アンタマの両手を頬に添える、”とほほ”ポーズはなんだかかわいい、ぼくのお気に入りだ。  
「アンタマ、君はぼくの彼女だったのか？・・・んんん、はじめて知った」  
「いつも言ってんじゃん！オレはタケの彼女だって、なんと言えれば理解するのじゃ、君は」  
「幼稚園から、このいまの一瞬においてずっとタケはオレの彼氏なのだ！」  
わざとらしく頬を膨らませながらぼくに説くアンタマもお気に入り。

彼女というより、ぼくと彼女は幼なじみというべきか。幼稚園の頃からずっと一緒にいるから、  
そういえるだろう。

「たしかに長い付き合いではあるかな、ところで重大発表とはなんだ？アンタマ」

「あっ、それぞれ、タケ！オレはやったぞ！」

「何を？」

「夢がかなったのじゃあ！タケ！」

天井を見上げるように視線を上に向け、手のひらで祈りの印を組む乙女かこれもいいかな。

「音大？」

もしかしたそうでは？と思いながらぼくは聞く。

「よく聞けタケ！、この天才的ピアニストでしかも美少女のオレは！」

「天才だったのか・・・美少女？んんんあえて否定はするまい」

幼稚園の頃にはすでにアンタマはピアノを演奏していたし、小、中、高、受賞の常連でもあったし。

美少女・・・個人の好みもあるし、これは微妙かな。

「あたりまえじゃっ！タケ！招かれたのじゃ！」

「大倭音楽大学にピアノ特待生じゃぞお、タケ！」

「わおっ！本当か？それ、アンタマやったな！そうかアンタマは天才だったのか！」

「おおお！タケも喜んでくれるかっ！わっははは！乾杯してくれ！乾杯しようタケ！」

日本で1、2を争う音大に特待生で進学することになったんだアンタマ。

置かれていた水とコーラの紙コップで乾杯するぼくとアンタマ・・・

どうせなら水ではなくてぼくもコーラがよかったなアンタマ。

「そうか、大学は東京か・・・」

「寂しいだろう？タケ、心配するな！連れて行ってやる！一緒にいこう東京へ！」

「東京の大学へ替えるんだタケ、タケならどの大学でもいけるだろう？」

「タケはいつもオレのそばにいないてはいけないのだ！彼氏だから！」

「いや、それはそれで・・・大変そうだ」

「わっははは！照れるなタケ！オレの最愛の人」

冬、そして春、時は静かに流れ希望と夢が開花する。

アンタマはピアノの才能をさらに大きく開花させるために東京へ、「タケのために女もみがいてくるぞっ！」

そう言って彼女は出雲を出て行った。

ぼくは地元の大学の工学部へ進学した。

歳とった両親をおいて、金のかかる東京の大学へはいけない、そう思った。

将来地元の機械メーカーに就職するつもりで工学部を選んだ。

「神社の跡継ぎ息子がなんで工学？」とよく同級生に聞かれるが、ぼくには10歳以上歳の離れた兄と姉がいる。

姉は嫁ぎ、兄はずいぶん前から修行にいったるから、高校の同級生がぼくを跡継ぎと思うのもしかたないことだ。